

## 「オリジナル教材」課題と授業における英語使用について

英語教育講座・池野修

### 1. 授業の概要

「英語科教育法4」(詳細はシラバスを参照)は、中学校英語一種免許取得にあたっての必修科目であり、教育実習を終えた3年次後学期(以降)に受講する科目である。授業では、英語リーディングの指導、英語科教育における異文化理解、英語学習意欲、英語教育評価、多様な言語活動、英語教師としての成長などのテーマを扱い、講義及び話し合い活動に加えて、言語活動体験、教科書単元分析、オリジナル英語教材の作成と発表、受講生によるリサーチの発表などの活動を行っている。

### 2. 授業の評価

#### 2.1. 授業評価方法

授業の成果と課題に関する情報を収集する目的で、学期末に授業アンケートを実施した。「英語科教育法」の授業に対しては、これまでも、目標の達成度、主要な活動の有用性など様々な角度から授業を評価を行ってきたが、今年度は、単純に、(1)「この授業でよかった点(テーマ、活動、課題)は何だと思いますか」、(2)「この授業への改善への提言を行って下さい」という2つの質問に答えてもらった。受講生22名の内18名から回答を得た。様々な内容の回答があったが、本報告では、「オリジナル教材」課題と授業における英語使用に限定して考察することとする。

#### 2.2. 「オリジナル教材」課題について

この授業の「良かった点」と判断された内容として、最も関連回答数が多かったものは、「オリジナル教材の作成と発表」である(回答数9名)。回答の中には次のようなものも含まれている。

- ・オリジナル教材を発表し合う活動がとても印象に残っている。学生それぞれが問題と感じていることやそれを解決するためにどのような教材を用いて授業をすればいいかを知ることができ、これからの授業のアイデアに生かすことができると感じた。
- ・自分が作った教材を他の受講生がどう思ったかを色々知ることが出来たし、他の人が作った教材を見て「こんな発想もあるんだ」と新たな発見が沢山ありました。

「オリジナル教材」課題を行い始めた頃(約10

年前)は、「自作教材を発表」というだけの内容であったが、この課題をより意義の大きなものにするために、現在では次のような工夫を加えている。

- (1)作成することが求められている教材の具体的なイメージを受講生に持たせるために、発表の2~3週間前に、具体例(現職教員が作成したもの、過年度の受講生が作成したもの)を示し、どこに工夫が見られ、どのような点で改善が望まれるかを説明する、
- (2)作成する教材の種類に制限をかける。例えば、過去には歌やクロスワードパズルなどをあまり考えずに提案する受講生もいたので、これらを禁止とした。
- (3)教材の評価基準を事前に示す(例:その教材を用いた活動の中で学習者はどの程度実際に英語を用いるか、言語材料の量やレベルは学習者に合っているか、活動の自由度は適切に設定してあるか etc.)。
- (4)教材発表後に振り返りレポートを課し、発表してわかった問題点やその改善案、他の受講生の発表で効果的であると思ったものについて考える機会を設ける。

これらのことも相まって、本課題の評価が高くなったものと考えられる。

もちろん、この課題(活動)にも改善の余地はある。例えば、他の受講生全員の教材について知る機会の提供である。授業では、時間的制約から、4人グループを作り、自主教材を残りの3人に向かって順番に発表、その後グループを作り直して再度発表という形をとった。この方式では合計6名の発表しか聞くことができない。かと言って、受講生一人一人が前に出て発表するというスタイルにすると時間がかかり過ぎる。この点に関して、ある受講生は「せっかくなので、是非全員の教材を見るためのフォルダ(?)をMoodle上などの作って下さることを願っています」と述べている。是非そのようにすることを検討してみたい。

また、提出してもらったオリジナル教材にどのようにフィードバックを行うかも課題である。この点について、ある受講生から「ご多忙だと思いますが、担当の先生にお時間があればオリジナル教材や期末レポートの添削アドバイスをいただきたいです」という回答もあった。現在は、課題を

提出して終わりとなっているが、提出された課題に効率的にフィードバックを行う方法、そしてそのフィードバックを参考に修正した教材を再提出してもらおう仕組みを考えてみたい。

## 2.2. 授業における英語使用について

本授業は英語教員養成の授業ではあるが、主に日本語を用いて講義や活動を行なっている。英語を用いているのは、「英語学習意欲」単元の一部と言語活動体験の部分（3 授業時間程度）でしかない。このことについて、ある受講生は、「専門的な内容なので難しいとは思いますが、モチベーションや学習評価などの題材で議論する部分をできる限り全て英語でやってみたかったです」と述べている。また、学期末レポートも英語／日本語のいずれで執筆することも許可したのであるが（ページ数の条件などで日本語／英語の間に差をつけている）、アンケート回答の中には、「レポートは全員英語で執筆する方が良いのではないかと思います。私は今回、自らの勉強のために英語で書くことを決めました。しかし、やっているうちに単語引きなどで苦労し、自身の英語文章能力の無さを痛感しました。こうやって英語で固い文章を書く機会もあまりないので、この授業で慣れておくことが必要なのではないかと考えました」というものがあり、授業や課題における使用言語についてあらためて考えさせられた。

授業をどの程度英語を用いて行うかは、簡単には答えの出ない問題である。一方で、講義の使用言語を英語に限定すると、扱える内容の幅と奥行きが制限されるのは避けられない。また、話し合いなどを英語で行うと参加できない受講生も出てくるであろう。学びの効率性や参加の機会の保証という点では日本語で行う方が適切である。しかし同時に、この「英語科教育法 4」は、中学校英語教員免許の必修科目であることも忘れてはならない。学習指導要領では、中学校英語授業も原則英語で行うことが明示されており、明らかにその能力（の基礎）を持っていない学生に英語教員免許を与えて良いのかという疑問も感じる。折衷案としては、もう少し英語で行う活動や時間を増やし、「英語授業について英語で話すことができる」ことの重要性について、英語免許取得を目指している学生の意識を高めていく必要があると考えている。